

『正法眼蔵』「仏性」卷訳註（五）

角 田 泰 隆

凡例

一、本稿は、二〇一九年における、駒澤大学大学院の角田ゼミ（宗学特講Ⅱ【演習】）で作成した資料を基に作成したものである。

二、【本文】は、本山版『正法眼蔵』（寛政十一年（一七九九）刊）を底本とし、左記の『正法眼蔵』諸本と校異して作成した。「校異」は本文下段に示したが、字体の違い（新字・旧字・異体字等）は、校異から除いた。諸写本によつて底本の本文を改めた部分もあるが、その場合は校異に示した。校異した諸本の略号は次の通りである。なお、これらの写本は全て『蒐書大成』に収録されている。

懷奘書写本…懷 正法眼蔵抄…抄 乾坤院所蔵本…乾 正法寺所蔵本…正 龍門寺所蔵本…龍
洞雲寺所蔵本…洞 瑠璃光寺所蔵本…瑠 長円寺所蔵本…長 玉雲寺所蔵本…玉 徳雲寺所蔵本…徳
永平寺所蔵嘉元二年（一一三〇四）書写本…嘉

三、【本文】は便宜的に適宜分割し、最初に段落分けを示すため【本文】のみをまとめて掲げ、番号を付した。底本の片仮名は平仮名に改め（子↓ね、キ↓ぬ、エ↓ぬ）、内容解釈に基づいて独自の句読点とルビを付した。【本文】・【懷奘書写本】の漢字は原典の字体をそのまま用いたが、【本文】以外は、【本文】からの引用も含めて、原則として新字体に改めた。

四、【語註】は既刊の辞典等を参照して新たに作成したが、辞典等をそのまま引用したものについては典拠を明記した。【語註】・【解説】で『正法眼蔵』を引用する場合は、大久保道舟編『校本正法眼蔵全』（筑摩書房、一九七一年四月）

より引用し、頁数のみ記した。但し、既刊の『正法眼蔵』「仏性」巻訳註収録箇所は、当該号の略号と頁数で示した。引用文中の傍点・傍線は、全て筆者が付したものである。参照文献・辞典の略号は次の通りである。

『大正新脩大蔵経』…『大正蔵』 大日本統蔵経…『正統蔵』

『景德伝燈録』(禅文化研究所、一九九〇年五月)…『禅文化本』

中村元編『仏教語大辞典』(東京書籍、一九八一年五月)…『中村仏教』

『新版禅学大辞典』(大修館書店、一九八五年十一月)…『禅学』

入矢義高・古賀英彦編『禅語辞典』(思文閣出版、一九九一年七月)…『禅語』

『大漢和辞典』…『大漢和』 『漢辞海』第四版(三省堂、二〇一九年二月)…『漢辞海』

大久保道舟編『道元禅師全集』下巻(筑摩書房、一九七〇年五月)…『大久保本』

水野弥徳子校註 岩波文庫本『正法眼蔵』(一九九〇～一九九三年)…『岩波文庫本』

『道元禅師全集』(春秋社〈原典版〉、一九八八～一九九一年)…『春秋社本』

『道元禅師全集』(春秋社〈原文対照現代語訳版〉、一九九九～二〇〇三年)…『春秋社本〈現代語訳版〉』

『永平正法眼蔵菟書大成』(大修館書店、一九七四～一九八二年、続輯一九八九～二〇〇〇年)…『菟書大成』

角田泰隆『正法眼蔵』「仏性」巻訳註(一)、『駒澤大学仏教学部研究紀要』七十四号、二〇一六年三月…『仏性訳註(一)』

角田泰隆『正法眼蔵』「仏性」巻訳註(二)、『駒澤大学仏教学部研究紀要』七十五号、二〇一七年三月…『仏性訳註(二)』

角田泰隆『正法眼蔵』「仏性」巻訳註(三)、『駒澤大学仏教学部研究紀要』七十六号、二〇一八年三月…『仏性訳註(三)』

角田泰隆『正法眼蔵』「仏性」巻訳註(四)、『駒澤大学仏教学部研究紀要』七十七号、二〇一九年三月…『仏性訳註(四)』

五、【直訳】は、できる限り本文に忠実に訳し、基本的に古文を現代語に訳すにとどめ、一部便宜的に漢字用語の現代語訳も行った。

六、【現代語訳】は、【直訳】に基づいて漢字用語の解説を加え、理解しやすくするために(へ)内に本文にない言葉を補い、必要に応じて()内に直前の語の解釈を付した。

七、【懐契書写本に見られる書き改めについて】は、懐契書写本の書き改めの前後でどのように内容が変化したかについて特に解説した。書き改めが少ない場合は、【解説】の中で簡単に言及する形とし、一切無い場合は略した。【懐契

書写本】掲載の理由については、「仏性訳註(二)」七七頁を参照されたい。

【本文】

① 第十四祖龍樹尊者、梵云那伽闍刺樹那。唐云龍樹、亦云龍勝、亦云龍猛。西天竺國ノ人ナリ也。至南天竺國ニ、彼ノ國之人、多ク信ニ福業ヲ。尊者爲ニ説ク妙法ヲ。聞ク者遍ヒ相謂テ曰ク、人ニ有ニ福業、世間ノ第一ニ。徒ニ言フ佛性ヲ、誰カ能觀レ之ヲ。尊者曰ク、汝欲見ニト佛性ヲ、先須レ除ク我慢。彼ノ人ノ曰ク、佛性大カ耶小カ耶。尊者曰ク、佛性ハ非ズ大ニ非ズ小ニ、非ズ廣ニ非ズ狹ニ、無ク福無シ報。不死不生ナリ。彼レ聞テ理ヲ勝タルマ、悉ク迴ニ初心ヲ。尊者復於テ座上ニ、現ニ自在身。如ニ滿月輪。一切衆會、唯聞テ法音ノ不レ觀師ノ相ヲ。

於テ彼ノ衆中ニ、有ニ長者ノ子、迦那提婆、謂ニ衆會曰ク、識ニ此ノ相ヲ否ヤ。衆會曰ク、而今我等目ニ所レ未レダ見、耳ニ無レ所レ聞ク、心ニ無レ所レ識、身ニ無レ所レ住スル。提婆曰ク、此レハ是レ尊者現ニ佛性ノ相ヲ、以示ス我等ニ。何ヲ以テ知レ之ヲ。蓋シ以テ三無相三昧、形如ニクナルヲ滿月ノ。佛性ノ之義、廓然トシテ虚明ナリト。言ヒ訖レバ輪相即隱。復居ニシテ本座ニ、而説キテ偈ヲ言ク、身現ニ圓月ノ相ヲ、以テ表ス諸佛ノ體ヲ。説法無ク其形、用辨非ニト聲色ニ。

② するべし、眞箇の用辨は、聲色の即現にあらず。眞箇の説法は、無其形なり。尊者かつてひろく佛性を爲説する、不可數量なり。いまはしばらく一隅を略擧するなり。

汝欲見佛性、先須除我慢。この爲説の宗旨、すぐさず辨肯すべし。見はなきにあらず、その見これ除我慢なり。我もひとつにあらず、慢も多般なり。除法また萬差なるべし。しかあれども、これらみな見佛性なり、眼見目觀にならふべし。

佛性非大非小等の道取、よのつねの凡夫・二乗に例諸することなかれ。偏枯に佛性は廣大ならんとのおもへる、邪念をたくはへきたるなり。大にあらず小にあざらん正當恁麼時の道取に罣礙せられん道理、いま聽取するがごとく思量すべきなり。思量なる聽取を使得するがゆゑに。

しばらく尊者の道著する偈を聞取すべし。いはゆる、身現圓月相、以表諸佛體なり。すでに諸佛體を以表しきたれる身現なるがゆゑに、圓月相なり。しかあれば、一切の長短方圓、この身現に學習すべし。身と現とに轉疎な

るは、圓月相にくらきのみにあらず、諸佛體にあらざるなり。愚者おもはく、尊者かりに化身を現せるを圓月相といふとおもふは、佛道を相承せざる黨類の邪念なり。いづれのとこのいづれるときか、非身の佗現ならん。まさにしるべし、このとき尊者は高座せるのみなり。身現の義は、いまのたれ人も坐せるがごとくありしなり。この身これ圓月相現なり。身現は方圓にあらず、有無にあらず、隠顯にあらず、八萬四千蘊にあらず、ただ身現なり。

③ 圓月相といふ、這裏は甚麼所在、説細説麤月なり。この身現は、先須除我慢なるがゆゑに、龍樹にあらず、諸佛體なり。以表するがゆゑに諸佛體を透脱す。しかあるがゆゑに、佛邊にかかはれず。佛性の満月を形如する虚明ありとも、圓月相を排列するにあらず。いはんや用辨も聲色にあらず、身現も色身にあらず、蘊處界にあらず。蘊處界に一似なりといへども以表なり、諸佛體なり。これ説法蘊なり、それ無其形なり。無其形さらに無相三昧なるとき身現なり。一衆いま圓月相を望見すといへども、目所未見なるは、説法蘊の轉機なり、現自在身の非聲色なり。即隱即現は、輪相の進歩退歩なり。復於座上現自在身の正當恁麼時は、一切衆會、唯聞法音するなり、不覩師相なるなり。尊者の嫡嗣迦那提婆尊者、あきらかに満月相を識此し、圓月相を識此し、身現を識此し、諸佛性を識此し、諸佛體を識此せり。入室瀉餅の衆たとひおほしといへども、提婆と齊肩ならざるべし。提婆は半座の尊なり、衆會の導師なり、全座の分座なり。正法眼蔵無上大法を正傳せること、靈山に摩訶迦葉尊者の座元なりしがごとし。龍樹末廻心のさき、外道の法にありしときの弟子おほかりしかども、みな謝遣したれり。龍樹すでに佛祖となれりときは、ひとり提婆を付法の正嫡として、大法眼蔵を正傳す。これ無上佛道の單傳なり。しかあるに、僭偽の邪群、ままに自稱すらく、われらも龍樹大土の法嗣なり。論をつくり義をあつむる、おほく龍樹の手をかれり、龍樹の造にあらず。むかしすてられし群徒の、人天を惑亂するなり。佛弟子は、ひとすぢに提婆の所傳にあらざらんは、龍樹の道にあらずとしるべきなり。これ正信得及なり。しかあるに、僞なりとしりながら稟受するものおほかり。謗大般若の衆生の愚蒙、あはれみかなしむべし。

※各段の資料作成担当者は左記の通りである(所属・課程年次は本稿提出当時のもの)。

①藤川直子(博士後期課程三年) ②水田泰成(修士課程二年) ③本山水悠(同前)

なお本稿は、右記の資料作成者に加えて、以下のゼミの参加者を加えて検討した共同研究である。

秋津秀彰（曹洞宗総合研究センター研究員）、横山龍顯（鶴見大学仏教文化研究所特任研究員）、菅野優子（博士課程一年）・坪井智聡（修士課程二年）・奥野憲昭・小椋樹里杏・塩田空奎・羽月智彦（修士課程一年）、阿部伸二・玉井宏道・吉田裕（聴講生）

*第十四祖龍樹尊者、梵ニ云フ那伽闍刺樹那ト。唐ニ云ヒ龍樹、亦タ龍勝ト、

亦タ云ニ龍猛ト。西天竺國ノ人ナリ也。至ルニ南天竺國ニ、彼ノ國之人、多ク信ズ福

業ヲ。尊者爲ニ説ニ妙法ヲ。聞ク者遙ヒニ相謂テ曰ク、人ニ有ルハ福業、世間ノ第一

ナリ。徒ニ言フ佛性ヲ、誰カ能ク覩レ之ヲ。尊者曰ク、汝欲レハ見ント佛性ヲ、先ツ須シク

除ク我慢ヲ。彼ノ人ノ曰ク、佛性大カ耶小カ耶。尊者曰ク、佛性ハ非ズ大ニ非ズ小ニ、

非ズ廣ニ非ズ狭ニ、無レ福無レ報、不死不生ナリ。彼レ聞テ理ヲ勝ルヲ、悉ク迴ス初

心ヲ。尊者復於ニ座上ニ、現ニス自在身ヲ。如シニ滿月輪ヲ。一切衆會、唯聞テ法

*音ノミヲ不レ覩師ノ相ヲ。

於ニ彼ノ衆中ニ、有テテ長者ノ子、迦那提婆、謂ニ衆會ニ曰ク、識ニ此ノ相ヲ否ヤ。

衆會曰ク、而今我等目ニ所レ未レ見、耳ニ無レ所レ聞ク、心ニ無レ所レ識、身ニ

無レ所レ住。提婆曰ク、此レハ是レ尊者現ニ佛性ノ相ヲ、以テ示ス我等ニ。何ヲ以

テ知レ之ヲ。蓋シ以ニテス無相三昧、形如クナルヲ滿月ノ。佛性ノ之義、廓然トシテ虚

明ナリト。言ヒ訖レハ輪相即チ隠レ、復居ニ本座ニ、而説テ偈ヲ言ク、身現ニ圓月

ノ相ヲ、以テ表ス諸佛ノ體ヲ。説法無ク其形、用辨非ニ聲色ニ。

第十四祖龍樹尊者ノ仏道にはなしとしるべし(底本八
丁半分)ナシ(洞)(瓊)(麤)、「仏性下」トシテ、
本文末、識語ノ後ニコノ一段全文ヲ補ウ(瓊)
闍(右「ア」アリ(抄)、左「アツ」アリ(正)、右「ア
ツ」アリ(龍))

刺(右「リ」アリ(抄)(正)、ラ「ア」アリ(龍))
唐(右「ハ」アリ(抄)(龍))

亦(右「ハ」アリ(龍))以下略
者(右「ノ」アリ(龍))以下略

通(右「ハ」アリ(抄)、右「タガヒニ」アリ(抄)、「タガイニ」
アリ(龍)) 謂(右「イツテ」アリ(抄)以下略
有(ナシ(乾)) 一(右「ノ」アリ(龍))

性(右「ト」アリ(抄))

欲(右「ハ、ハ」アリ(抄)、「ハ」アリ(龍))
見(右「ムト」アリ(抄)、「ト」アリ(龍))

性(右「ハ」アリ(正))

大(右「ナリヤ」アリ(抄)、「ナル」アリ(龍))
耶(右「ナリ」アリ(抄)、取(乾))以下略、右「カ」
アリ(龍))以下略

小(右「ナリ」アリ(抄)、「ル」アリ(龍))
日(云(乾)(正)(龍))

不(左「レ」アリ(正)(龍))以下略
勝(右「タルコト」アリ(抄)、「ヲ」アリ(龍))

廻(右「メダラス」アリ(抄))

座坐(懷(抄)(乾)(正)(龍)) (瓊)

現(右「ス」アリ(抄)、「ルコト」アリ(龍))
在(右「ノ」アリ(抄))

法(右「ノ」アリ(抄)) 音(右「ヲ」アリ(正))
衆(右「ノ」アリ(抄)(龍)) 右「シテ」アリ(抄)

婆(右「ト云」アリ(正) 識(右「レリヤ」アリ(抄))
ナシ(乾)、右「ル」アリ(正)、「ルヤ」アリ(龍))

否(右「イナヤ」アリ(抄)(正))

會(右「レ」アリ(正)(龍)) 等(右「ヲ」アリ(正))
而今(右「イマ」アリ(正))

耳無所聞(底本「耳所未聞」(懷(抄)(乾)(正)(龍))

※懷奘書写本の書き改めナシ。

(璿)長(玉)ニヨリ訂。 婆一右下「ノ」アリ(龍)
 此一右下「ハ」アリ(抄)(龍) 是一右「ノ」アリ(正)
 相一右下「ナリ」アリ(抄)
 何一右下「ヲ」アリ(抄)、「ゾ」アリ(龍)
 以一右下「テカ」アリ(抄)
 知一右下「リナン」アリ(正)、「ン」アリ(龍)
 蓋一右「クダシ」アリ(抄) 相一右下「コ」アリ(正)
 味一右下「ノ」アリ(正)、「ヲ」アリ(龍)
 形一右「チ」アリ(抄) 如一右下「シ」アリ(正)(龍)
 月一右下「ノ」アリ(抄)(龍)
 廓一右「クワク」アリ(抄)
 虛一右「コ」アリ(抄) 明一右下「ト」アリ(龍)
 訖一「訖」追記、右下「ヲハルニ」アリ(抄)
 座一坐(懷)(乾)(正)(龍)(璿)
 說一ナシ(乾) 體一體(玉)
 用一辨一右「ヨウヘン」アリ(抄) 辨一辨(懷)
 非一右下「ト」アリ(龍)

【書き下し】

第十四祖龍樹尊者、梵に那伽闍刺樹那と云ふ。唐に龍樹、亦た龍勝と云ひ、亦た龍猛と云ふ。西天竺国の人なり。南天竺国に至る。彼の国の人、多く福業を信ず。尊者為に妙法を説く。聞く者遮ひに相い謂て曰く、人に福業有るは、世間の第一なり。徒に仏性を言ふ、誰か能く之を觀る。尊者曰く、汝仏性を見んと欲ば、先づ須く我慢を除くべし。彼の人の曰く、仏性大か小か。尊者曰く、仏性は大に非ず小に非ず、広に非ず狭に非ず、福無く報無く、不死不生なり。彼れ理の勝たるを聞て、悉く初心を廻す。尊者復た座上に於て、自在身を現ず。満月輪の如し。一切衆会、唯だ法音のみを聞て師の相を觀ず。彼の衆中に於て、長者の子、迦那提婆有て、衆会に謂て曰く、此の相を識や否や。衆会曰く、而今、我等目に未だ見ざる所、耳に聞く所無く、心に識る所無く、身に住する所無し。提婆曰く、此れは是れ、尊者仏性の相を現じ、

以て我等に示す。何を以て之を知る。蓋し無相三昧、形満月の如くなるを以てす。仏性の義廓然として虚明なりと。言ひ訖れば輪相即ち隠れ、復た本座に居して、而偈を説きて言く、身円月の相を現じ、以て諸仏の体を表す。説法其形無く、用辨声色に非ず、と。

【語註】

第十四祖…本段の出典は、『景德伝燈録』巻一「龍樹章」であると考えられる。なお、両者の違いは、後述の【参考】の表と【解説】を参照。龍樹：梵 *Nagarjuna* 音訳那伽闍剌樹那・那伽曷樹那・那伽阿順那。意識竜猛・竜勝とも。二〜三世紀頃の人で、大乘仏教思想に通暁し、その哲学的論理付けを行ったインドの代表的仏教学者。中観派の祖であり、八宗（俱舍宗・成実宗・律宗・法相宗・三論宗・華嚴宗・天台宗・真言宗）の祖師として尊崇される。西インドの婆羅門出身（『龍樹菩薩伝』には「出南天竺梵志種也」（『大正蔵』五十・一八四頁上段）とあるが、『景德伝燈録』・『天聖伝燈録』等には「西天竺人也」とある。【参考】参照）で、若くして婆羅門の学問を修得したのち仏教に転向し、有部系の部派に出家して仏教を学んだ。主著に『中論』があり、『大智度論』や『十住毘婆沙論』など大乘經典の注釈書を著して、大乘仏教思想の教学体系を樹立した。なお道元禪師は、『正法眼蔵』「仏性」を始め、「仏祖」・「発菩提心」・「深信因果」の巻等で龍樹の名を挙げ、「出家功德」の巻では、「西天東土、出家在家の菩薩・祖師おほしといふとも、龍樹祖師におよばず」（六〇六頁）と述べ、『学道用心集』でも「龍樹祖師」と龍樹を讃えている。天竺…インドのことで、竺土・竺乾・西乾・西天ともいう。福業…幸福をもたらす善い行ないのこと。福は善の結果であり、福の原因としての善も福という。ここで「福業を信ず」とは、当時の婆羅門教徒が福業によつて天界への再生を目指していたことをいう。妙法…すばらしい教え。ここでは仏法のこと。我慢…自己に対する執着から起こる慢心。おごり高ぶる心。七慢（慢・過慢・慢過慢・我慢・増上慢・卑下慢・邪慢）の一。四煩惱（我痴・我見・我慢・我愛）の一。ここでは、吾我を離れ我執を捨てることができなければ仏性を見ることはできないとする。自在身…自由自在の身。ここでは龍樹が静かに坐して一切の執着から離れた自由なはたらきを示したことをいう。満月輪…満月のこと。満月輪とも読む。『中村仏教』の「月輪」の項には、「月のこと。月は形が円くて輪のように見えるので、「輪」の字を付する」（一八三頁）とある。ここでは龍樹そのものの、仏性そのものを満月輪としている。法音…説法の声。衆会…その場に参集している人々。迦那提婆…三世紀頃の人。梵

Kāra-deva 片目の提婆の意味、また聖提婆 Ārya-deva とも。禅宗の付法蔵の第十五祖。法を龍樹に嗣ぎ、これを羅睺羅多に伝えた。南天竺婆羅門出身(『禅学』一六八頁)。**目所未見**：目で見ることがないということ。『景德伝燈録』では、「目所未覩」と記載されている。また、『天聖広燈録』卷三「龍樹章」でも「目所未聞」となっている(【参考】参照)。**耳無所聞**：耳で聞くことがないということ。底本(本山版)では「耳所未聞」となっている。これは『正法眼蔵却退一字参(参註)』(『菟書大成』十八・二九九頁)によつたとと思われる。**心無所識**：意識で認識することがないこと。**身無所住**：身がここに止まっていないこと。無所住とは、なにものにもとどまり執着しないこと(『禅学』一一〇八頁)であり、『華嚴經』を竺法護が訳した『仏説如来興顕經』卷一には、「諸導師住諦、智慧悉聖達。哀慧如虚空、執持於善權。如最勝之法、則入斯供養。智慧離衆垢、其身無所住(諸の導師は諦に住し、智慧は悉く聖に達す。哀慧は虚空のごとく、善權に於て執持す。最勝の法の如く、則ち斯の供養に入る。智慧は衆垢を離れ、其の身は住する所無し)。(『大正蔵』十・五九六頁)とあり、また、『大方廣菩薩藏文殊師利根本儀軌經』第十三(『大正蔵』二〇・八八三頁)には、「彼若無業、身無所住、何得祥瑞(彼若し業無くば、身住する所無く、何が祥瑞を得ん)」とある。**無相三昧**：無相とは形がないのではなく、本来のありのままの相が、ありのままに現われていること。その本来のありのままのあり方をありのままに現す禅定(坐禅)を無相三昧という。『大智度論』卷五に、「一切法無有相。一切法不受不著。是名無相三昧(一切法は相有ること無し、一切法は受けず、著さず。是、無相三昧と名づく)。(『大正蔵』一五・九六頁)とある。**廓然**：からりと開けたさま。心が広くさつぱりし何の執着もないさま(『禅学』一五四頁)。**虚明**：はつきりしていること(『中村仏教』三五一頁)。**円月相**：満月相とも。月の円満なる相を本具の仏性妙心自体にたとえたもの。龍樹が無相三昧に入つて説法するに、その姿は見えず、円月の相のみが現れたという故事に基づく。円月の相は仏性の相であり、諸仏の体であるとす(『禅学』一一〇頁)。**用弁**：(本当の)はたらきの意。『中村仏教』には「用辨」ではなく「用辯」の項があり、「説法に同じ」としている(一三九二頁)。尚、底本(本山版)や『参註』(『菟書大成』十八・二九九頁)では「用^テ辨^ズ非声色^ヲ」(用て非声色を弁ず)と訓読しているが、道元禅師は続く本文で「真箇の用弁は声色の即現にあらざ」と示しており、『聞書抄』(『菟書大成』十一・一三八頁)でも「用弁」を熟語として捉えていることから、ここでは「用辨」を熟語とし「はたらき」と解釈した。ちなみに、「用弁」は、『正法眼蔵』では「仏性」の巻のみ使用されている語句であり、この漢文(七四頁)と次段(八二頁)以外では、「仏性の満月を形如する虚明ありとも、円月相を排列するに

あらず。いわんや用弁も声色にあらず、身現も色身にあらず、蘊処界にあらず、「この画いまだ月相ならざるには、形如なし、説法せず、声色なし、用弁なきなり」の二箇所にみられる。また、この「弁」は、旧字には数種類があり、意味がそれぞれ異なり、「辨・辦（分ける、明らかにする）」、「辯（言葉で）おさめる」、「辦（つとめる）」、「瓣（瓜の種子、果実のふさ、はなびら）」、「辯（あむ、組む）」、「辨（内股）」などがある（『大漢和』十一〇八三頁他参考）。校異で示したように写本では「辯」の字は「懷奘書写本」のみに使用されている。

【直訳】

第十四祖龍樹尊者は、梵語では那伽闍刺樹那と言う。唐（中国）では龍樹、また龍勝と言ひ、また龍猛と言う。西天竺国の人である。（後に）南天竺国に至るに、彼の国の人は、多く福業を信じていた。尊者は（人々の）為に妙法を説いた。聞く者はたがいに言い合つて、「人に福業が有る（こと）は、世間で第一である。徒らに仏性といつても、誰がよくこれを見るのか」と言つた。尊者は言つた、「汝、仏性を見ようと思ふなら、先ず必ず我慢を除くべきである」と。彼の人言うには、「仏性は大であるか、小であるか」と。尊者は言つた、「仏性は大でもなく小でもなく、広くもなく狭くもなく、福もなく報もなく、死もなく生もない」と。彼は理の勝れているのを聞いて、悉く初心を翻した。尊者は復た座上に於いて、自在身を現じた。（その姿は）満月輪のようであつた。一切の衆会は、唯だ法音のみを聞いて師の相を見なかつた。

彼の衆中に於いて、長者の子の迦那提婆がいて、衆会に、「この相を識るかどうか」と言つた。衆会は、「今、我等の目で未だに見たことがない所であり、耳で聞いたことがない所であり、心で認識したことがない所であり、身に住することない所である」と言つた。提婆が、「此れは、尊者は仏性の相を現じて、以て我等に示すのである。何を以てこれを知ることができたか。おおよそ無相三昧の形が満月の如くで（あることに）よつてである。仏性の義は、廓然として虚明である」と言つた。（提婆が）言い訖むると輪相はたちまち隠れた。（尊者は）復たもとの座に坐わつていて、そして偈を説いて言つた、「身は円月の相を現して、以て諸仏の体を表す。説法は其の形が無く、用弁は声色ではない」と。

【現代語訳】

第十四祖龍樹尊者は、インドの言葉（サンスクリット語）（の音訳）では那伽闍刺樹那と言う。唐（中国）では龍樹とも、龍勝とも、龍猛とも言う。西インドの人である。（後に）南インドに行くと、南インドの国の人の多くは、福業（善い行いをする）と幸福になること）を信じていた。尊者は（人々に）妙法（仏の教え）を説いた。聞く人々は互いに、「人に福業があることこそが、この世で一番大切なことである。やみくもに仏性といっても、誰も仏性をよく見たことがない」と言った。尊者は、「お前達、仏性を見ようと思うなら、先ず必ず我慢（自己の慢心）を取り除くべきである」と言った。ある人が、「仏性というものは大きいのか小さいのか」と質問した。尊者は、「仏性は大きくもなく小さくもなく、広くもなく狭くもなく、幸福もなく（悪業の）報いもなく、死もなく生もない」と言った。彼は（龍樹の言っている）道理が勝れているのを聞いて、総て最初の考えを改めた。尊者はまた法座に上り、そこにありのままに坐った。（その姿は）満月輪のようであった。全ての人々は、ただ説法の声を聞くだけで尊者の姿を見ることはなかった。

参集した人々の中に、長者の子である迦那提婆がいて、集まった人々に、「この（尊者の）姿がわかるか」と言った。人々は、「今、私達の目には見えず、耳には聞こえず、心に認識できず、（尊者の）身体の姿はどこにもない」と言った。提婆は、「これは、尊者が仏性の姿を現して、私達に示しているのである。どうしてそのように分かるのか。思うに、無相三昧は、形が満月のようであるからである。仏性というのは、（満月輪のように）はつきりと明らかであるのである」と言った。（提婆が）言い終わると（尊者の）輪相（円い月の姿）はたちまち隠れて、再び（尊者は）もとの座に現れて、偈を説いて言った、「身体で円月の相を現して、それによって諸仏の身体を表した。説法には決まった形がなく、そのはたらきは認識の対象ではないのである」と。

【解説】

当該箇所は、「龍樹円月相」の引用文であるが、この引用文をはじめとする龍樹段は「洞雲寺本」「瑠璃光寺本」「嘉元本」にはなく（「本山版」のおよそ八丁半に亘る部分）、「龍樹変相可加也」と記されている（「瑠璃光寺本」は卷末識語の後に「仏性下」として、この一段全文を掲げている）。この引用文の出典は定かではないが、最も類似していると思われるのは『景德伝燈録』である。参考までに『景德伝燈録』『天聖広灯録』『宗鏡録』との比較を次に挙げておく。

【参考】『正法眼藏』「仏性」卷所収、龍樹伝本文・他出典対照表

『正法眼藏』「仏性」	『景德伝燈録』卷一「龍樹章」	『天聖広燈録』卷二「龍樹章」	『宗鏡録』（卷第九十七）
<p>第十四祖龍樹尊者、梵云那伽闍刺樹那。唐云龍樹、亦龍勝、亦云龍猛。西天竺国人也。至南天竺国。彼国之人、多信福業。尊者為說妙法。聞者遍相謂曰、人有福業、世間第一。徒言仏性、誰能觀之。尊者曰、汝欲見仏性、先須除我慢。彼人曰、仏性大耶小耶。尊者曰、仏性非大非小、非広非狭、無福無報。不死不生。彼聞理勝、悉迴初心。尊者復於座上、現自在身。如滿月輪。一切衆会、唯聞法音不覩師相。</p>	<p>第十四祖龍樹尊者、西天竺国人也。亦名龍勝。始於毗羅尊者得法。後至南印度。彼国之人多信福業。聞尊者為說妙法通相謂曰、人有福業世間第一、徒言仏性誰能觀之。尊者曰、汝欲見仏性先須除我慢。彼人曰、仏性大小。尊者曰、非大非小非広非狭、無福無報不死不生。彼聞理勝悉迴初心、尊者復於座上現自在身如滿月輪。一切衆唯聞法音不覩師相。</p>	<p>第十四祖龍樹尊者、西天竺国人也。亦名龍勝。始於毗羅尊者得法。後至南印土。彼国之人、多信福業、無智慧性。龍樹為說教法、信受甚稀。聞尊者至、互相謂曰、人有福業、世間第一。徒言仏性、誰人觀之。尊者曰、汝欲見仏性、先須除我慢。彼曰、仏性大小。尊者曰、非広非狭、無量無則、無福無報、不死不生。彼聞理勝、悉乃迴心。尊者復於座上、身現円月相、唯聞說法音。</p>	<p>第十四祖龍樹尊者、行化到南印土。彼国人多修福、不会仏理、唯行小辯、不具大智。及問仏性、而云、布施、我求福業、非解仏性。汝会仏性、為我說之。師曰、汝欲學道、先除我慢、生恭敬心方得仏性。衆曰、仏性大小。師曰、非汝所知、非說大小、若說大小、即是大小、非仏性也。彼衆曰、我欲棄小辯歸于大海。龍樹即為說法、対大衆而現異相、身如月輪、当於座上、唯聞說法、不覩其形。</p>
<p>於彼衆中、有長者子迦那提婆、謂衆会曰、識此相否。衆会曰、而今我等目所未見、耳無所聞、心無所識、身無所住。提婆曰、此是尊者現仏性相、以示我等。何以知之。蓋以無相三昧、形如滿月。仏性之義、廓然虚明。</p>	<p>彼衆中有長者子、名迦那提婆。謂衆曰、識此相否。衆曰、目所未覩安能辨識。提婆曰、此是尊者現仏性相以示我等、何以知之。蓋以、無相三昧形如滿月、仏性之義廓然虚明、言訖、輪相即隱復居本座、而</p>	<p>衆中有長者、名迦那提婆。謂曰、識此相否。衆曰、目所未覩、焉能弁識。提婆曰、此是尊者現仏性相、以示我等。言訖、輪相即隱、還居本座、而說偈曰、</p>	<p>彼衆有一長者、名曰提婆。謂諸衆曰、識此瑞不。彼衆曰、非其大聖、誰能識也。爾時提婆、心根宿淨、亦見其相、默然契会。乃告衆曰、師現仏性之義、非師身者、無相三昧、形如滿月、仏性之義也。語未</p>

<p>言訖輪相即隱。復居本座、而 說偈言、 身現円月相 以表諸仏体 說法無其形 用辨非声色</p>	<p>說偈言、 身現円月相 以表諸仏体 說法無其形 用辨非声色 (『禪文化本』一三二頁)</p>	<p>說法無其戒 用辨非色声 (柳田聖山主編『禪学叢書』五、 中文出版、一九八三年十月、 三七三頁)</p>	<p>訖、師即現本身、座上說偈曰、 身現満月相 以表諸仏体 說法無其形 用辨非声色 (『大正藏』四十八・九三八頁 中段)</p>
--	---	---	--

しるべし、眞箇しんこの用辨ようべんは、聲色しやうしきの即現そくげんにあらず。眞箇しんこの説法せつぽうは、無其むご

形ぎやうなり。尊者そんじやかつてひろく佛性ぶつじやうを爲説いせつする、不可ふか數量しゆりやうなり。いまはし

ばらく一隅いちぐうを略舉りやくこするなり。

汝欲見佛性にょよくけんぶつじやう、先須除我慢せんしゆじやうがまん。この爲説いせつの宗旨しゆうし、すござず辨肯べんけんすべし。見

はなきにあらず、その見けんこれ除我慢じよがまんなり。我もひとつにあらず、慢も多た

般はんなり。除法じよほうまた萬差ばんしやなるべし。しかあれども、これらみな見佛性けんぶつじやうなり、

*眼見目観げんけんもくとにならふべし。

佛性ぶつじやう非大非小ひじやうとうの道取どうしゆ、よのつねの凡夫ぼんぶ・二乗にじやうに例諸れいしよすることなか

れ。偏枯へんこに佛性ぶつじやうは廣大こうだいならんとのみおもへる、邪念じやねんをたくはへきたるなり。

大だいにあらず小しやうにあらざらん正當しやうとう恁麼いんゑ時の道取どうしゆに聖礙けいげせられん道理どうり、いま

聽取ちやうしゆするがごとく思量しりやうすべきなり。思量しりやうなる聽取ちやうしゆを使得しとくするがゆゑに。

しばらく尊者そんじやの道著どうしやくする偈げを聞取もんしゆすべし。いはゆる、身現しんげん圓月相えんげつそう、以

表諸佛體ひやうしよぶたゐなり。すでに諸佛體しよぶたゐを以表いひましたる身現しんげんなるがゆゑに、圓月えんげつ

相そうなり。しかあれば、一切いっさいの長短方圓ちやうたんほうえん、この身現しんげんに學習がくしゆうすべし。身しんと現げん

のナシ(乾) 辨べん辯べん(徳) (瓊) (瓊) (徳)

無其形むごけい一廣いつくわう其形ごけい (龍) なり一也 (正)

ひろく一廣いつくわう(抄) 佛性ぶつじやう一性佛いせうぶつ(瓊)

不可數量ふかじゆりやう一不可數量ふかじゆりやう(龍)

しばらく一擧いつこ(抄)

略りやく右下した「ホ」アリ(龍) なり一也(抄)

汝欲見佛性にょよくけんぶつじやう、先須除我慢せんしゆじやうがまん、先須除せんしゆじやうがまん

我慢がまん、先須除せんしゆじやうがまん、先須除せんしゆじやうがまん、先須除せんしゆじやうがまん

我慢がまん、先須除せんしゆじやうがまん、先須除せんしゆじやうがまん、先須除せんしゆじやうがまん

我慢がまん、先須除せんしゆじやうがまん、先須除せんしゆじやうがまん、先須除せんしゆじやうがまん

我慢がまん、先須除せんしゆじやうがまん、先須除せんしゆじやうがまん、先須除せんしゆじやうがまん

我慢がまん、先須除せんしゆじやうがまん、先須除せんしゆじやうがまん、先須除せんしゆじやうがまん

我慢がまん、先須除せんしゆじやうがまん、先須除せんしゆじやうがまん、先須除せんしゆじやうがまん

我慢がまん、先須除せんしゆじやうがまん、先須除せんしゆじやうがまん、先須除せんしゆじやうがまん

我慢がまん、先須除せんしゆじやうがまん、先須除せんしゆじやうがまん、先須除せんしゆじやうがまん

我慢がまん、先須除せんしゆじやうがまん、先須除せんしゆじやうがまん、先須除せんしゆじやうがまん

我慢がまん、先須除せんしゆじやうがまん、先須除せんしゆじやうがまん、先須除せんしゆじやうがまん

我慢がまん、先須除せんしゆじやうがまん、先須除せんしゆじやうがまん、先須除せんしゆじやうがまん

我慢がまん、先須除せんしゆじやうがまん、先須除せんしゆじやうがまん、先須除せんしゆじやうがまん

我慢がまん、先須除せんしゆじやうがまん、先須除せんしゆじやうがまん、先須除せんしゆじやうがまん

とに轉疎なるは、圓月相にくらきのみならず、諸佛體にあらざるなり。

愚者おもはく、尊者かりに化身を現ぜるを圓月相といふとおもふは、佛道

を相承せざる黨類の邪念なり。いづれのところのいづれのときか、非身

の佗現ならん。まさにしるべし、このとき尊者は高座せるのみなり。身現

の儀は、いまのたれ人も坐せるがごとくありしなり。この身これ圓月相現

なり。身現は方圓にあらざ、有無にあらざ、隱顯にあらざ、八萬四千蘊に

あらず、ただ身現なり。

※懷契書写本の書き改めナシ。

【語註】

真箇の…まことの。ほんとうの。箇は接尾語。用弁…はたらき。本稿七七頁参照。無其形…定まつた形がないこと。不可數量…数えきれないこと。弁肯…わきまえ、うべなうこと。多般…許多般に同じ。多くの種類。般は種類の意。万差…多くの差があること。千差万別。眼見目観…目でみること。眼見は、普通にもものを見ること、目観は、視線を一点に集めて觀察すること。『御抄』には、「眼与目ハ只同物也。眼ニ見ト云モ目に観ト云モ只同事也」(『菟書大成』十一・三九頁)とあり、『私記』には、「眼見目観にならふべしとは、眼見・目観、同物にして異形にあらざるをもて、仏性と諸法と不二の理をあかすなり」(『菟書大成』十九・五六九頁)とある。これらによれば「眼見目観」とは「眼見」と「目観」とが「同物」「同事」「不二」であることを言った語で、その場合『私記』が注釈するように「仏性」と「諸法」が不二であると示した語となる。しかしながら、本稿では「見仏性」(仏性を見ること)と「除我慢」(我慢を除くこと)

佛 右下「ノ」アリ(龍)、以下略
以 右下「テ」アリ(龍) がナシ(玉)
系へ(璫) 月 右下「ノ」アリ(龍)、以下略

圓 四(乾)、以下略

あらずナシ(璫) 化 他(璫)

おもふ 非(乾)、をもう(正)、をもう(璫)

黨 儻(懷)(乾)(正)(龍)(璫)(長)(玉)、右「トウ」アリ(龍)

いづれのところのいづれのとき 何ノ所何ノ時(抄)

作 他(懷)(乾)(正)(龍)(璫)(長)(玉、化)(抄)

このとき 此時(抄)

坐 一(座)、右「ザ」アリ(長) これナシ(璫)

あらず 非(抄)、以下略

隱顯 右「ランケム」アリ(抄)

蘊 右「ウン」アリ(抄)

ただ 一(た)、(懷)(乾)(正)(龍)(璫)(長)(玉)、只(抄)

が同一であることを示した語と解釈した。但し、他の解釈として「眼見目観にならふべし」を、仏性を見るということは「眼（目）で見（観）たものに習いなさい」とする訳も可能であり、その場合、除我慢の者が見れば「目に見えるまが仏性である」という解釈となる。例諸：例は「似る」諸は「これ」「かれ（ら）」の意。「コレニ例ス」と訓読する『春秋社本へ現代語訳版』一・二八二頁）。かれらと同じであること。ここでは、「凡夫」「二乗」とは同じではないことをいう。偏枯：一方にかたよる意。偏見。正当恁麼時：まさにこのようなとき。「仏性訳註（二）」八一頁参照。罣礙：一般には妨げることをいうが、ここでは一体になっていることを指す。「仏性訳註（二）」一五三頁参照。道著：道は言う、の意。著は動詞について意を強める助字。以表：通常は「以て表す」と読むが、道元禪師は「以表」と熟語で用い、円月相と諸仏体が全く同一のもので二見对待でないことを示している。転疎：ますますおろそかなさま。転は、程度がしだいに深まることで、ますます。疎は、おろそかなさま。「仏性訳註（二）」九九頁参照。化身：身を変化（へんげ）すること。ここでは化身して龍樹が円月の相を現したと思っただけではないことを示す。尚、この「龍樹円月相」の話はまた「龍樹変相」の話とも言われる。党類：同じなさま。方円：方は、四角。円は、丸。形のこと。ここでは円月相が形に関わらないことをいう。隠顕：隠れることと顕れること。八万四千蘊：無数の集まり。八万四千は、無数の意。蘊は、集まり。

【直訳】

知るべきである、真箇の用弁は、声色の即現ではない。真箇の説法は、無其形である。尊者がかつてひろく仏性を為説することは、不可数量である。いまはひとまず一隅を略挙するのである。

「汝欲見仏性、先須除我慢」。この為説の宗旨を、すこざず弁肯しなければならぬ。「見」はないわけではなく、その「見」とはこれ「除我慢」である。「我」もひとつではなく、「慢」も多般である。「除」法もまた万差であるはずである。そうであっても、これらにはみな「見仏性」であり、眼見目観にならうべきである。

「仏性非大非小」等の道取、尋常の凡夫・二乗に例諸してはならない。偏枯に「仏性は広大なものであろう」とのみ思うことは、邪念をたくわえてきたのである。大でもなく小でもないであろうという正当恁麼時の道取に罣礙されるであろう道理を、いま聴取するように思量すべきである。思量である聴取を使得るのであるから。

しばらく尊者の道著する偈を聞取しなければならぬ。いわゆる、「身現円月相、以表諸仏体」である。すでに「諸仏体」を以表してきている。「身現」であるから、「円月相」である。そうであるから、一切の長短方円を、この「身現」に学習しなければならぬ。身と現とに転疎であるのは、円月相にくらいだけではなく、諸仏体ではないのである。愚者が思うに、尊者がかりに化身を現したのを円月相というと思うのは、仏道を相承していない党類の邪念である。いかなる場所のいかなる時に、非身の他現であろうか。まさに知りなさい、このとき尊者は高座していただだけである。身現の儀は、いまの誰しもが坐っていたようにあつたのである。この身これが円月相現である。身現は方円ではなく、有無ではなく、隠顕ではなく、八万四千蘊ではなく、ただ身現なのである。

【現代語訳】

知らなければならぬ、ほんとうの用弁（はたらき）とは、認識の対象そのままの現れではない。ほんとうの説法とは決まつた形が無いのである。尊者がそれまでに広く仏性を説かれたことは、数えきれないほどである。ここではひとまずその一端を簡略に示すのである。

「汝欲見仏性、先須除我慢」（仏性を見ようと思うなら、先ず必ず我慢を除きなさい）。この説示の根本的な意味を、よくよく考えわきままなければならぬ。「見」はないわけではなく、その「見」とは「除我慢」（我慢を除くこと）である。「我」もひとつではなく、「慢」も多種多様である。それを「除く」方法もまた千差万別であるに違いない。そうであつても、これら（除我慢）はみな「見仏性」であり、「見仏性」と「除我慢」とは同じであると学ばなければならぬ。

「仏性非大非小等」の言葉は、世間一般の凡夫・二乗（のいう大小）と同じように考えてはならない。一方にかたよつて「仏性は広大なものである」とのみ思うことは、間違つた考えを持ち続けてきたためである。（尊者が）「大でもなく小でもない」というまさにその時尊者が言われた言葉をそのまま道理として、いま（仏性は広大でもなく小さくもないと）聴いたままに思量すべきである。思量とはありのままに聞くことであり、思量（ありのままに聞く）という聴取（聴き方）を使い得ているのであるから。

ひとまず尊者の言われる偈を聞きなさい。それは、「身現円月相、以表諸仏体」である。すでに諸仏の体を表わして

いる「尊者の」身現」であるから、「円月相」である。そうであるから、一切の長・短・方・円を、この「身現」によつて学習しなさい。「諸仏の」身（身体）と「現」（身の現れ）の理解が疎かであるのは、円月相の理解が浅いだけではなく、諸仏の身体ではないのである。愚かな者が、「尊者がかりに変化身を現したことを円月相という」と思うのは、仏道を相承していない者たちの間違つた考えである。いかなる場所でもいかなる時に、へ尊者は自分の身ではない他の姿を現したのであるか。まさに知りなさい、このとき尊者は高座に坐っていただけである。身現のありようは、いまの誰しもが坐っているように坐つていたのである。この身がそのまま円月相の現れである。身現は四角でも丸いのもなく、有るのでも無いのでもなく、隠れたり顕れたりもせず、八万四千蘊（無数のものの集まり）ではなく、ただ身現なのである。

圓月相といふ、這裏是甚麼所在、說細說麤月なり。この身現は、先須除

我慢なるがゆゑに、龍樹にあらず、諸佛體なり。以表するがゆゑに諸佛

體を透脱す。しかあるがゆゑに、佛邊にかかはれず。佛性の満月を形如

する虚明ありとも、圓月相を排列するにあらず。いはんや用辨も聲色に

あらず、身現も色身にあらず、蘊處界にあらず。蘊處界に一似なりとい

へども以表なり、諸佛體なり。これ說法蘊なり、それ無其形なり。無其

形さらに無相三昧なるとき身現なり。一衆いま圓月相を望見すといへど

も、目所未見なるは、說法蘊の轉機なり、現自在身の非聲色なり。即隱

即現は、輪相の進歩退歩なり。復於座上現自在身の正當恁麼時は、一切

衆會、唯聞法音するなり、不觀師相なるなり。

尊者の嫡嗣迦那提婆尊者、あきらかに満月相を識此し、圓月相を識此

し、身現を識此し、諸佛性を識此し、諸佛體を識此せり。入室瀉餅の衆

たとひおほしといへども提婆と齊肩ならざるべし。提婆は半座の尊なり、

衆會の導師なり、全座の分座なり。正法眼藏無上大法を正傳せること、

月一右下、ノアリ(龍)、以下略、いふ一云(抄) 這裏是甚麼所在、說細說麤月一這裏、是甚麼處在、

說細說麤月(龍) 裏一裡(正) 所一處(懷) (璣)、処(乾)(正) 說細說麤月一說細說麤月(抄) 說細說麤月一說

細說麤(正) この一此(抄) 先須除我慢一先須除我慢(龍) 慢一ナシ(乾)(正) (長)(玉) ゆゑ一故(抄)、以

下略 一へ(懷)(乾)(龍)(長)(玉)、以下略 龍樹にあらず一非龍樹(抄)

佛一右下、ノアリ(龍)、以下略 なり一也、右、アリ(龍)、以下略 以一右下、ニテアリ(龍)、以下略 一ナシ(抄) 一へ(抄)(德)

か一、(懷)(抄)(乾)(正)(龍)(長)(璣)(玉) は一わ(乾)の一ナシ(抄) 形如一形、如(龍) 虛一右、(ゴ)アリ(抄) も一ナシ(龍)

排列一右、「ハイレツ」アリ(抄) あらず一非(抄) 一(抄) 一(抄) 辨一辯(懷)、辦(長)、右、「ヘン」

身一(懷)(抄)(乾)(正)(龍)(璣)(長)(玉) 似一右、「ジ」アリ(龍) い一云(抄)、以下略 (一)一(璣)、以下略 以表一以表(龍)

なり一也(正) 說一ナシ(長)(玉)(德) 無其形一無其形(龍) 無其形一無其形(龍) いま一今(抄) 望一右、「ハウ」アリ(抄)

目所未見一目所未見(龍) 未見一見末(乾) なり一也、右、「ナリ」アリ(璣) 非聲色一非聲色(龍)

歩一ナシ(抄) 復於座上復於二座上(龍) 一(抄) 復於座上(龍) 唯一右下、タ一アリ(龍) 不觀師相一不觀師相(龍) 觀一右、「ト」アリ(抄)

靈山に摩訶迦葉尊者の座元なりしがごとし。龍樹未廻心のさき、外道の法にありしときの弟子おほかりしかども、みな謝遣したれり。龍樹

すでに佛祖となれりしときは、ひとり提婆を付法の正嫡として、大法眼

蔵を正傳す。これ無上佛道の單傳なり。しかあるに、僭偽の邪群、ま

に自稱すらく、われらも龍樹大士の法嗣なり。論をつくり義をあつむる、

おほく龍樹の手をかれり、龍樹の造にあらざ。むかしすてられし群徒

の、人天を惑亂するなり。佛弟子は、ひとすぢに提婆の所傳にあらざらん

は、龍樹の道にあらざとしるべきなり。これ正信得及なり。しかあるに、

偽なりとしりながら稟受するものおほかり。謗大般若の衆生の愚蒙、あ

はれみかなしむべし。

※懷契書写本の書き改めナシ。

【語註】

這裏是甚麼处在、説細説麤月（這裏是れ甚麼の处在にしてか、細と説き麤と説く月）：「円月相」が「這裏是甚麼处在、説細説麤」という月であることを示した。「這裏是甚麼处在、説細説麤」は、『正法眼蔵』「行持」上巻に、「黄蘗いはく、遮裏は什麼所在、更説什麼麤細（遮裏是れ什麼の所在にしてか、更に什麼の麤細をか説く）（一三八頁）とある。

たとひおほしーたといを、し（璠）
提婆と齊肩ならざるべしーナシ（乾）（正）（龍）
尊ー右下、「者」アリ（璠）

未廻心ー未ダ廻心（龍）

れりーりれ（正）

はーナシ（璠）

付ー附（懷）（乾）（正）（龍）（璠）（長）（玉）

上常（玉）

あーナシ（璠）

僭潜（乾）（正）（璠）、譜（長）（玉）（徳）

僭偽ー右、「センギ」アリ（龍）

まー、（乾）（正）（龍）（璠）（長）（玉）（徳）

ほー、（璠）、以下略

造ー右、「ツクル」アリ（龍）

徒ー右、「ト」アリ（龍）

これー是、右、「これ」アリ（璠）

のーナシ（乾）

『臨濟録』では、「師問、毛吞巨海芥納須弥。為是神通妙用本体如然。普化踏倒飯床。師云、太僂生。普化云、這裏是什麼所在、説僂説細。(師問う、「毛、巨海を呑み、芥、須弥を納る」と。為是神通妙用なるか、本体如然なるか。普化、飯床を踏倒す。師云く、「太僂生」。普化云く、這裏是れ什麼の所在にしてか、僂と説き細と説く)」とあり、「真理の真只中に何の粗っぽいだの綿密だのということがあるか、の意」(『禪の語録』十、臨川書店、一九七二年四月、一五七〜一五九頁)とある。この語は「円月相」が細僂に関わらない相であることを述べたもので、「円月相」と言えば、その円さに何か特別な意味があるように捉えられがちであるが、形に執られるべきではないことを示したのか。あるいは「這裏は甚麼所在」の語は、「仏性」の巻の冒頭の「是什麼物恁麼來」の語と同様に、「円月相」が真理(事実)をありのままに現したものであるという解釈もできるかもしれない。色身：肉身、肉体。ところで、『懷奘書写本』や『御抄』はじめ、底本以外は「色心」と作るが、本稿では前後の解釈から「色身」の方が妥当であると判断し、底本により「色身」とした。底本(本山版)は、『正法眼蔵傍註』において、「心」を「身」に改めている(『蒐書大成』十九・一六頁)ことから安心院蔵海(二七三〇〜一七八八)の説を受けているのであろう。蘊處界：五蘊・十二処・十八界のこと(『禪学』七四頁)。説法蘊：説法の集まり。無相三昧：前出七七頁。ここでは龍樹が坐禅した相をいうか。転機：大いなるはたらき・作用(『禅学』八八九頁)。進歩退歩：進んだり退いたりすること。ここでは自由自在なはたらきをいう。入室瀉餅：師の室(部屋)に入り、親しく教えをうけ、一餅の水を一餅にすべて瀉ぐように、師の教えをすべて受け嗣ぐこと。嗣法のこと。靈山：靈鷲山のこと。ここでは、靈鷲山において摩訶迦葉尊者が釈尊の弟子の中で座元(第一座、一番上の座席に座るもの、最も勝れた弟子)であったことをいう。半座：釈尊が摩訶迦葉尊者に半座を分かつた故事。分座も同意。半坐を分かつとは、自分の座席を半分譲ることをいい、自分と同等の力量を持つ者と認めて、自分に代わって説法を許すことをいう。謝遣：ことわりかえす。ひまをやる(『禅学』四七二頁)。付法：法を付嘱し伝えること。嗣法、伝法とも。僞偽：偽って身分・地位をうること(『禅学』六七七頁)。ここでは龍樹尊者の法を嗣いだと偽ること。法嗣：法を伝授した弟子。

【直訳】

「円月相」というのは、「這裏は甚麼处在、説細説麤一月である。この「身現」は、「先須除我慢」であるから、龍樹ではなく、諸仏体である。「以表」するから諸仏体を透脱する。そうであるから、仏辺に関わらない。仏性の満月を形

如する虚明があるといつても、円月相を排列するのではない。まして「用弁」も「声色」ではなく、「身現」も「色身」ではなく、「蘊處界」ではない。「蘊處界」に一似であるといつても「似表」であり、「諸仏体」である。これが「説法蘊」であり、それが「無其形」である。「無其形」がさらに「無相三昧」であるとき「身現」である。一衆が今「円月相」を望見するといつても、「目所未見」であるのは、「説法蘊」の転機であり、「現自在身」の「非声色」である。即隱即現は、輪相の進歩退歩である。「復於座上現自在身」のまさにそのような時は、一切衆会は、「唯聞法音」するのであり、「不覩師相」であるのである。

尊者の嫡嗣迦那提婆尊者は、あきらかに満月相を識此し、円月相を識此し、身現を識此し、諸仏性を識此し、諸仏体を識此した。入室瀉餅の衆がたとえ多いといつても、提婆と斉肩ではないであらう。提婆は半座の尊であり、衆会の導師であり、全座の分座である。正法眼蔵無上大法を正伝したことは、靈山において摩訶迦葉尊者が釈尊の座元であったのと同じことである。龍樹が未だ廻心していなかった以前、外道の法であった時の弟子が多かったが、みな謝遣してしまつた。龍樹がすでに仏祖となつた時は、ひとり提婆を付法の正嫡として、大法眼蔵を正伝した。これが無上仏道の単伝である。そうであるが、僭偽の邪群は、勝手に自称した、我々も龍樹大士の法嗣であると。論をつくり義をあつめていゝるが、多くは龍樹の名を借りているだけで、龍樹の造ではない。むかしすてられた群徒が、人天を惑乱しているのである。仏弟子は、ひとすじに提婆の所伝でなければ、龍樹の言葉ではないとするべきである。これは正信得及である。そうであつても、偽であるとしりながら稟受するものが多かつた。大般若を誇る衆生の愚蒙を、あはれみかなしむべきである。

【現代語訳】

円月相というのは、ありのままに見ればよいのであり、まん丸であるとか粗いとかの形にとらわれてはならない月である。この〈仏性の〉身現（身の現れ）は、除我慢の（我慢を除いた）〈身現〉であるから、龍樹〈のみ〉ではなく、諸仏の身現としての身体（も同様）である。〈仏性を〉表しているのであるから、諸仏の身体を超えているのである。そうであるから、仏ということにも関わらない。仏性が満月を形として如実に現している、はっきりした明確な姿であるとしても、「円月相」を並べて言うのではない。まして〈諸仏の〉はたらかも姿形に現れたものではなく、身現も肉

体ではなく、人間の認識対象ではない。認識対象のようであっても、〈仏性の〉表れであり、〈仏性が〉諸仏の身体へとして現れているのである。これ（円月相）は説法が集まって身体を形成しているのであり、それには決まった形はない。形がないものが更に無相三昧である（ありのままに現われている）とき〈坐禅の姿をした〉身となって現れるのである。一同がここで「円月相」を望み見たにもかかわらず、それが目に見えなかったのは、説法の集まりの大いなるはたらきであったからであり、声や形ではない自由自在の身を現したからである。〈尊者の姿が〉隠れたり現れたりしたのは、円月相の自由自在なはたらきである。また座上に自由自在の身を現したまさにその時、集まったすべての人々は、ただ説法を聞くのみで、師（龍樹尊者）の姿を見ることはなかったのである。

尊者の嫡嗣である迦那提婆尊者は、明確に満月相を認識し、円月相を認識し、身現を認識し、諸仏性を認識し、諸仏性を認識した。龍樹尊者より嗣法した弟子たちが多くといっても、提婆と肩を並べる者はいないであろう。提婆は〈師の〉半座を分けられた尊者であり、大衆の導師であり、〈師の〉全てを分け与えられた尊者である。〈提婆が龍樹尊者より〉正法眼蔵無上大法を正伝したことは、靈山（釈尊）のもとで摩訶迦葉尊者が一番弟子であったのと同じである。龍樹が仏教に帰依する以前、外道（仏教以外）の教えを信奉していたとき、多くの弟子がいたが、みな去らせてしまった。龍樹がすでに仏祖となつてからは、提婆ひとりだけを付法の正嫡として、仏法を正伝した。これこそ無上の仏道がまっすぐに伝わつたのである。そうであるが、〈龍樹の〉法を得たと偽る邪悪な者たちは、我々も龍樹大士の法嗣であると、勝手に自称した。〈彼らは〉論書をつくり釈義を編集したが、多くは龍樹の名を借りているだけで、龍樹の著作ではない。むかし〈龍樹に〉すてられた者たちが、人天（衆生）の世界を惑わし乱しているのである。仏弟子は、まっすぐ提婆に伝わつたものでなければ、龍樹の言葉ではないと知るべきである。これが正しい信仰を得るといふことである。しかしながら、偽りであると知りながら受け伝える者が多かった。大般若（大いなる智慧）を誇る衆生の愚かさを、憐れみ悲しむべきである。

※本稿では、最初の漢文（引用文）以外の【解説】は記載せず、次稿「龍樹」段終了後にまとめて記載する。

〈キーワード〉道元、懷奘、『正法眼蔵』、「仏性」巻、訳註、校異